メタ認知の働きで批判的思考が深まる

道田泰司

一　はじめに

批判的思考(critical thinking)は，これからの社会で，そしてこれからの教育において必要といわれている力の一つである。たとえば教育学者の佐藤学氏（1）は次のように述べている。

ＯＥＣＤは，現在の子どもが社会人となる二〇二〇年において，加盟国三〇か国の製造業に携わる労働者の比率は，労働人口の一〇％から二％に激減すると推定している。二十一世紀の社会は，知識が高度化し複合化する社会であり，その知識が絶えず流動し，更新され，発展する社会である。創造的思考，批判的思考，コミュニケーション能力，探究的な学びなどが求められているのは，この社会的変化に対応している。

知識が高度化し，複合化し，流動し，更新され，発展する社会とは，Ｐ．ドラッカーのいう知識社会，Ｌ．サローのいう知識集約型社会，文部科学省がいくつかの答申で「知識基盤社会」と表現している社会であろう。

知識を生産する立場にある者にとって，創造的思考やコミュニケーション能力と並んで批判的思考が必要になってくるのは頷けるであろうが，それだけではない。近年，Ｐ

ＩＳＡ型読解力，人間力，社会人基礎力，ジェネリック・スキルなどの中に含められているように，思考力は，一般市民が健全な生活を送るうえで，知識や情報を取捨選択し，あるいは適切に活用し適切に問題解決や意思決定を行うためにも必要な力なのである。

本稿では批判的思考に焦点を当て，批判的思考がどのようなものであるかを簡単に論じたうえで，批判的思考とメタ認知の関係について考え，メタ認知という観点から批判的思考について考えていく。

二　批判的思考とは何か

批判的思考とは何か。学問的にはさまざまな議論があるが（2），ここではその議論には立ち入らずにシンプルに考えていきたい。考えるヒントは，「これからの社会において必要な思考力」の中で「批判的」と呼ぶのがふさわしいものは何か，である。

それは第一には，権威者も含め他人の意見を無批判に鵜呑みにしないことである。かつての教育においては，受験圧力が高いこともあり，固定的な知識を無批判に受け入れ，それをいかに正しく再生できるかが求められていた。しかし佐藤（1）が指摘するように，これからの社会において知識が流動し更新されるのであれば，かつての正解が将来に渡っても正解であり続けるかどうかは分からない。立場が異なれば正解も異なるかもしれない。そうであるならば，特定の知識を無条件に鵜呑みにすることはできない。たとえそれが権威者と目される人から提供された知識であっても，自分なりに吟味した上でそれを受け取るかどうかを決定すべきであろう。

これは情報を受け取る際だけの話ではない。自分が何かの行動を起こすときもそうである。かつての工業化社会においては，習慣的に，あるいは先達の後を追い無批判的に行動すればよい場面も少なからずあったであろう。戦後の日本が欧米に追いつき追い越せというキャッチアップ型経済の道を進んできたのはその一例である。しかし社会の変化が大きければ，かつて適応的な行動であったものがいつまでも適応的とは限らない。どう行動するかについて前例を無批判に踏襲するのではなく，自分が行おうとしていることに対して批判的な吟味を行う必要がある。

これらを踏まえた上で，批判的思考の学問的な定義を確認しておこう。最も有名な批判的思考の定義は，エニス（3）

の「何を信じ何を行うかの決定に焦点を当てた，合理的で反省的な思考」である。情報を受け取る際にも行動を起こす際にもきちんと考える必要があるということであり，先に論じたこととおおむね対応するであろう。きちんと考える際の考え方は平たくいうと，理にかなった考え方（合理的）で，じっくりと考える（反省的）ということである。

批判的思考をどう捉えるかについては，筆者も筆者なりの定義を行い図式化している（図１）。それは，「見かけに惑わされず，多面的に捉えて，本質を見抜く（あるいは，本質を求め続ける）」というものである。エニスは情報を受け取るときと行動するときの両方を挙げていたが，この定義では，どう情報を受け取るかを決定するのもどう行動するかを決定するのも一種の問題解決であると考え，問題解決の流れ（問題発見→解の探索→解の評価→解決）の中に批判的思考を位置づけている。表現は異なるが，大まかに目指していることは同じである。

以上のように，「批判」（無批判的に鵜呑みにしないこと）を通してよりよい思考を達成しよう，というのが批判的思考なのである。

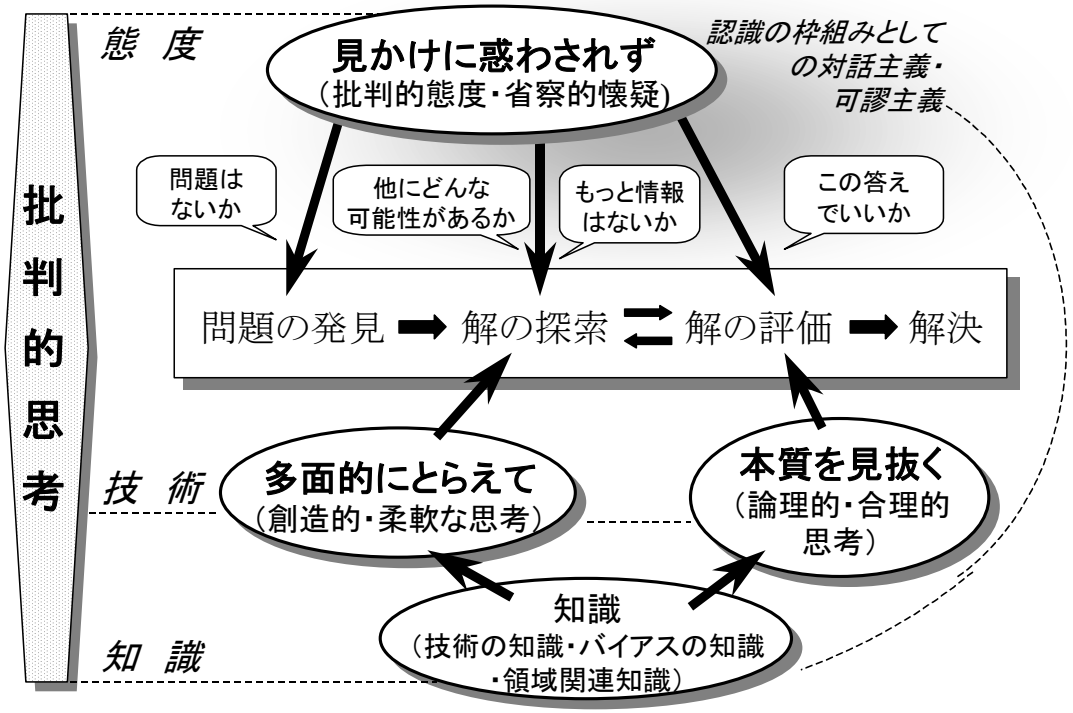

図１　批判的思考の概念図

三　批判的思考とメタ認知

1．批判的思考とメタ認知の関係

では批判的思考と，本特集のテーマである「メタ認知」とはどのような関係にあるのであろうか。さまざまな批判的思考研究者が批判的思考のモデルを提唱しており，その中には，表現はさまざまではあるがメタ認知的なものが含まれている。そのことについては田中・楠見（5）に詳しく論じられているので参照されたい。

この点に関しても本稿では専門的な議論には立ち入らず，シンプルに考えていくことにする。それに際して一つ押さえておきたいのは，批判的思考とメタ認知は研究上も教育上も，かなり重なりがあるということである。たとえばどちらでも，「情報の矛盾や曖昧さに気づくか」という観点から研究が行われている。あるいは，メタ認知を高める教育と銘打たれているが，そのまま批判的思考教育と呼べるものも少なからずある。もちろん逆もしかりである。

これを踏まえた上で，まずは出発点として，批判的でない「日常的な思考」について考えてみよう。我々は毎日，思考や問題解決を行っている。どのような順序で仕事をこなすかを決めたり，休日をどう過ごすかを悩んだりといったように，ちょっとしたことを考えている。そういうときには多くの場合，直感的に，今までの経験や自分なりの常識を元に考えて答を出す。それはたいてい，さほど悪い結果は生まない。そしてその場合も，大筋においては図1に示したような問題解決の流れに沿って思考は行われている。

しかし，ときにはじっくりと，あるいはきちんと考える必要があることも出てくる。重要な事柄について考えるときなどがそうである。そこで行われるべき思考が批判的思考である。ではそれは，日常的な思考とはどこが異なるのか。筆者の考えでは，図1にあるフキダシのようなつぶやきを行うこと，すなわち自分の思考をある程度意識的にモニタリングしコントロールしている点が違う。つまり，日常的な思考にかなり意識的にメタ認知的な活動を加えることで，思考は「批判的な思考」として深まるのである。

2．メタ認知で思考を深める

メタ認知という観点から考えるならば，日常的な思考に何をプラスすれば批判的思考になるのかが分かりやすい。それは，思考に関するメタ認知的な知識をもち，いつもより丁寧に自分の思考過程をモニタリングしコントロールす

ることである。

この場合のメタ認知的な知識とはたとえば，論理的で妥当な推論とはどのようなものなのか，どうしたら妥当な推論を組み立てることができるのか，などについての知識である。論理的な推論は日常的な推論とは異なる部分があるため，そのような知識は欠かせない。また，人が（あるいは自分が）どのように不適切な思考を行いがちかという思考のバイアスに関する知識も有用である。このような知識をもっていると，自分の思考をより客観的に見つめ，適切にコントロールすることが可能になる。

批判的思考におけるメタ認知的なモニタリングは，図１のフキダシにあるようなつぶやきである。たとえば，普段ならあまり気にも留めないような小さな気づきに注意を向けて立ち止まってみることが，新たな問題発見につながるかもしれない。日常的にそんなことばかりしていては，円滑な日常に支障が出てしまう。しかし，きちんと立ち止まりはしないけれど，自分の気づきにちょっとだけ注意を向けてみることを習慣化するといいだろう。イメージ的にいうならば，車の運転中，停止はしないけれど減速するとか，ミラーや目視で周囲の状況をチラッと確認するという感じである。このようなメタ認知的活動を，道田・宮元（6）では「ちょっとクリシン」（ちょっとだけクリティカルシンキングしてみよう）と呼んでいる。

解や可能性を探索する際にも，メタ認知的なモニタリングをすることで思考は深まる。解の探索に際して，人は自分の経験や常識の範囲内で行いがちである。それは狭い範囲に留まってはないだろうか。一面だけに偏ってはいないだろうか。別の立場から考えられないだろうか。あえて逆を考えてみてはどうだろうか。もっと情報を得れば考え方が変わってくるのではないか。このように意識的にモニタリングすることは，思考を深める上で重要である。

解の評価においても同じである。この考え方でいいのだろうか。ほかの考え方とどちらが説得力があるだろうか。立場の異なる他人からみたらどうだろうか。ほんの一例ではあるが，以上のようなモニタリングを意識的に行うことで思考過程が適切にコントロール・調整され，より深い思考へとなっていく。

このようにじっくりと思考を行うことは，まさに「何を信じ何を行うかの決定に焦点を当てた，合理的で反省的な思考」を行うこと，すなわち批判的思考を行うことである。

それは，入ってくる情報や行おうとすることに対してより丁寧な吟味を行おうとすることであり，スムーズかつ直感的に行われがちな自分の思考の流れを，ある種の「批判」を意識的に行うことで，深めることといえる。

四　メタ認知で批判的思考をパワーアップする

1．メタ認知で批判的思考を深める

批判的思考は一種類ではない。そこで，批判的思考を対象にさらにメタ認知的な活動を行うことで，批判的思考そのものを深めることが可能である。

批判的思考の最もベーシックな形は，その思考が「論理的」に妥当かどうかを判断するというものである。しかし日常的な議論においては，明示されていない暗黙の前提が必ず存在するため，議論の妥当性を厳密に定めることはできない。通常は自分の常識や経験に基づいて暗黙の前提を埋め，その上で妥当性を判断するのだが，実のところ，そこにどのような前提を想定するかによって議論の妥当性は高くも低くもなる。そこで，「ある議論に対して何らかの評価を下している自分の思考」自体を対象とした思考が必要となってくる。その評価を下すにあたって自分がどのような前提を想定したのか，それとは異なるどのような前提がありうるのか，などを考えるのである。

このような思考は，自分とは異なる意見を持つ他人を理解するときに役に立つ。自分の視点から見る限りその人の意見が非論理的なものに思えたとしても，「その人はなぜそのように考えたのだろうか」と問うてみることで，その人なりの考え方の道筋が見えてくることがある。それは，どのような前提があれば妥当でない議論が妥当なものになるか，と問うことである。

このような思考はまた，対立する複数の意見をよりよく理解するときにも役に立つ。対立する意見があるとき，人は往々にして自分の好みで意見の優劣を判断しがちである。そこで，まずはそれらの意見が想定している前提の違いを考えてみる。うまくそれが明らかになれば，より高い見地から両方の意見を整理して位置づけることができるかもしれないし，場合によっては両者を統合することができるかもしれない。

以上のような考え方をするということは，要するに，自分自身の思考を対象にさらなるメタ認知的活動を行うことである。そうすることで自分とは異なる考えを理解できる

であろうし，あるいは自分自身の考えをより深く理解できるであろう。それは批判的思考そのものを深めていくことになる。なおこのような思考に唯一の正解はなく，終わりなく続けていくことができる。その意味で批判的思考とは，二で述べたように「本質を求め続ける」ものなのである。

２．メタ認知で批判的思考を広げる

メタ認知的な活動を意識することで，批判的思考を「深める」だけでなく「広げる」こともできる（図２）。

そもそも批判的思考は誰にでもできるし，現に誰でもやっていると筆者は考える。少なくとも自分が得意な領域，よく知っている状況では，人は合理的かつ反省的に思考しているはずである。そういうところでは，豊富な知識をもっているだろうし，さまざまな体験をしているだろうから，無批判的に一つの考えに飛びついたりはしない。もし失敗などをしたときにも，じっくりと状況を分析し反省しそこから学ぶことができるはずである。

難しいのは，必要な場面で適切に批判的思考を行うことである。それが詳しくない領域であればなおさらである。知識や経験がない分，考えることそのものが難しくなる。

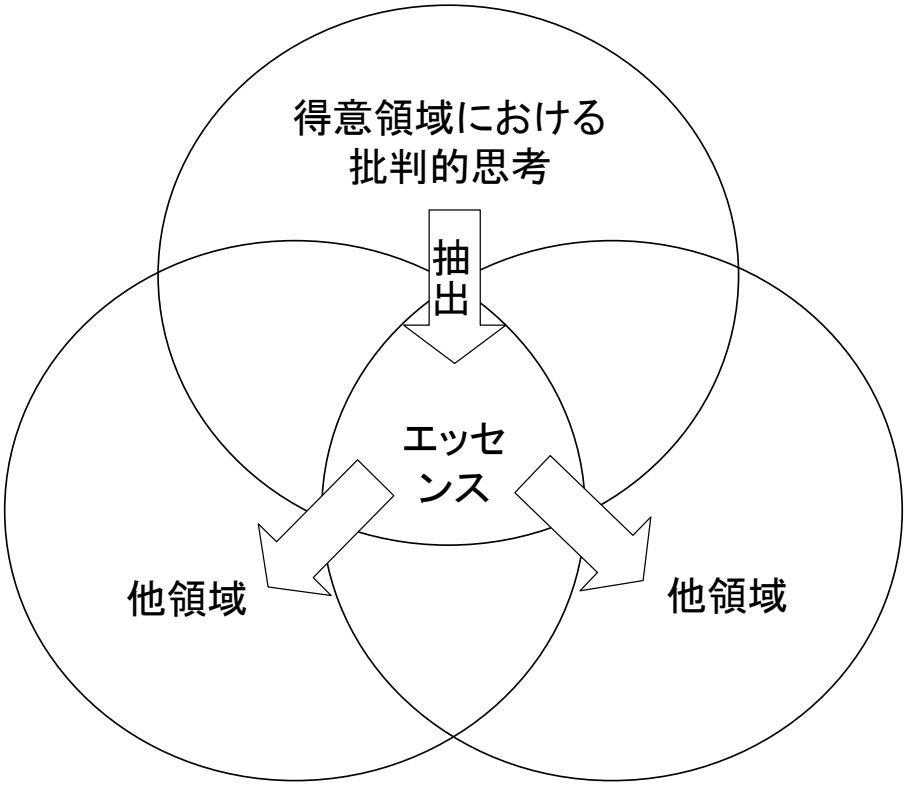

図２　メタ認知で広げる

感情が絡むような場面もそうだろう。つい感情が高ぶってしまうと，じっくり，合理的に考えることは難しくなる。

そこで，よく知っている領域で自分が行っている思考を意識化し，対象化・言語化し，一般原則のような形で考え方を抽出するのである。そういうことを意識的に行えば，あまり得意でない領域で行き詰まってしまったときに考えるヒントを見出すことができるかもしれない。それは，メタ的に自分の思考を振り返り，そこから学ぶことである。

五　おわりに

本稿では，我々が日常的に行っている直感的，経験的な思考に対して意識的にメタ認知的モニタリングやコントロールを行うことで思考が批判的なものになることを指摘し，さらに，批判的思考そのものに対してもメタ認知的活動を行うことで思考が深まり広がることを指摘した。

実はここで論じたことは，メタ認知と批判的思考の関係についての一般的・代表的な見解というわけではない。そもそもメタ認知と批判的思考の関係についてきちんと論じているものはあまり多くはないのである。そこで筆者なりに一番納得のいく関係を考えてみたのが本稿の考え方である。これが適切かどうかはわからないが，このように捉えることで両者の関係がすっきりと捉えられ，また，これからの社会を生きていく上で必要な力としての批判的思考そのものもよりよく理解できると筆者は考えている。

〔引用文献〕

（1）佐藤　学　(2003)　教師たちの挑戦―授業を創る学びが変わる　小学館．

（2）道田泰司　(2003)　批判的思考概念の多様性と根底イメージ　心理学評論，46，617-639.

（3）Ennis, R. H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Ed.), Teaching thinking skills: Theory and practice (pp.9-26). New York: W. H. Freeman.

（4）道田泰司　(2001)　批判的思考　森敏昭（編）　おもしろ思考のラボラトリー　北大路書房．

（5）田中優子・楠見　孝　(2007)　批判的思考プロセスにおけるメタ認知の役割　心理学評論，50，256-269.

（6）道田泰司・宮元博章　(1999)　クリティカル進化論

―『ＯＬ進化論』で学ぶ思考の技法―　北大路書房．

〔参考文献〕

＊道田泰司・宮元博章　（1999）　クリティカル進化論―『ＯＬ進化論』で学ぶ思考の技法―　北大路書房．

＊Ｍ・Ｎ・ブラウン＆Ｓ・キーリー　（2004）　質問力を鍛えるクリティカル・シンキング練習帳　ＰＨＰ研究所．

＊伊勢田哲治　（2005）　哲学思考トレーニング　ちくま新書．

〔みちた・やすし　琉球大学教育学部教授〕